©琉球新報　2016年01月31日　朝刊25面　記事数：1/1　<1/1枚>
希望この手に　沖縄の貧困・子どものいま＝第１部（１６）　非行（上）　家「寂しいだけ」

希望この手に
沖縄の貧困・子どものいま
第1部 ⑯

仕事で帰らぬ父／食事、冷たいまま

非行 ㊤

家「寂しいだけ」

たいていの小学生が楽しみにする運動会が大嫌いだった。「昼食時間がたまらなかった。友達がとてもうらやましかった」。30代前半の女性は幼いころを思い出す。

午前の競技が終わると周りの子どもたちは家族の元に走り弁当を囲む。両親に寄ようだい、祖父母まで来てにぎわうところもある。だが父子家庭だった女性は、40代の父は仕事で来られず、母も祖父母もいない。隅で1人隠れるようにしていると友人家族が誘ってくれた。「優しいお母さんだった。でも気まずかった」

◇　◇

自営業の父は仕事でほとんど家に帰らなかった。それでも合間を縫って授業参観には来てくれた。だが当時は父子家庭は珍しく「育（イク）メン」という言葉もない。教室の後ろで友人の母親に交じって立つ姿は「すごく嫌だった。来ている父も、教室にいない母も」。むしろお父さんっ子だったが、うれしい気持ちとは程遠かった。

家庭の経済状況は「極貧」。電気やガスが止められることもしばしば。「冬の水シャワーの冷たさは今でも覚えている」

家に食事の準備はほとんどなく、学校がある間は給食が頼りだった。長期休みはほとんどがカップラーメン。料理のできない父が借引きされた弁当や総菜を買い置きしていることもあったが、電子レンジがなく「冷たいままが普通」。3年生くらいからはテレビや料理本を見よう見まねでフライパンに油をひいて卵焼きや焼き飯を作った。だが一生懸命作っても食べるのは1人。食欲も湧かず「おいしいとも感じなかった」。

誰もいない家の寂しさや空腹を紛らわそうと学校のクラブ活動に入った。「夜7時ごろまで居られたし、学童クラブと違って金も掛からなかったから」。だが長くは続かなかった。

友人の家に行くと嫌でも違いが目に付いた。部屋はきれいに整い、笑顔のお母さんがいて、おもちゃや夕飯がある。「自分にはないものばかりで、うらやましかった」。友人たちは当時人気があったキャラクター「セーラームーン」の人形を持っていた。

思い満たされず諦め

この部分は著作権の関係でご提供できません。

父子家庭だが父はほとんど帰らず、友達と家出や非行を繰り返していた中学生時代の女性＝沖縄本島（本人提供）※一部画像にぼかしを入れています

「本当は欲しかった。でも父の苦労も見ていて、買ってほしいとは言えなかった」

小学生だった女性は周りに気を遣って望みを口にできず、SOSを出すこともできなかった。そんな少女に、周りが気付いて手を差し伸べることもなかった。

◇　◇

両親が離婚し、父と2人の生活が始まったのは小学2年。でもそれ以前から家では独りぼっちで「家にいても寂しいだけだった」。父は仕事。30代だった母はギャンブルに走り、やはり家にいなかった。夜中に父と遊技場へ歩いて母を捜しに行ったこともある。暗い夜空に光る繁華街のネオンがまぶしかった。

たまに母がいるときに帰宅しても「お帰り」と声を掛けられることはなかった。一緒にいても会話はなく「外に行け」と追い出された。突然感情的に怒りだし手を上げることもあった。

「何に対して怒っているのか分からない。思い出すと今でも怖い」と当時を振り返る。自分を疎ましがっているとしか思えない母には心を閉ざすしかなく、殴られても泣きもしなかった。ただめんどくさいと思っていた。

だから両親が別れることになっても「本当は家族みんなでいたかったけど、そんなこと無理」と思うほど女性の心は冷え切っていた。親とも思えない母、仲の悪い兄から離れられ、解放されたとすら感じた。

だが父との生活が始まっても、経済的な苦しさや寂しさは変わらなかった。「本当は構ってほしかった。せめて『どうせ自分を見てくれない』と思っていた」。満たされない思いは節目に変わっていった。中学生になると家出を繰り返し、濃い化粧をしてブランドのロゴが大きく書かれた服を着る「ヤンキー」になった。（子どもの貧困取材班）

情報やご意見をお寄せください。
文化部生活班 ☎098(865)5162　社会部 ☎(865)5158
seikatu@ryukyushimpo.co.jp
FB「チームいしがんとう」で発信中